

魔王監禁～オレ様勇者に捕らえられた女魔王～

ショートストーリー

特典から数日たつたある日のお話

おもわず勇者の口から深いため息が漏れる。

長く続いた戦いが終われば世界は平和になると
思っていた。だが現実はそうなかなかうまくはいか
ないようで、2つの異なる種族が同じ世界に生きる

とある日の昼過ぎ、

「…………はあ…………終わった…………」

勇者は一人、朝から書類整理に追われていた。

朝執務室に入るなり、机の上に山のように積まれ
た書類を見つけたときは軽く目眩がしたが、休憩
も取らず一心不乱に片付けたおかげで、半日ほど
で終わったのは幸いだつた。

(いや、魔王と二人でゆっくり暮らせる平和な世界
を作るつて約束したじやねえか、ここで弱音なんて
吐いてる場合じやない)

勇者は弱音が出そうになるのを、頭を振つてなん
とか振り払い、パンと自身の両頬を叩いて気合を入れ直す。
(戦いが終わつたら、あいつともつと一緒にいら
れると思つたんだけどな……)

(まあ、まさかこんなことを思うなんて想像できな
かつたけどな、あいつとの出会いは俺が監禁したの

が始まりだつたからな……）

勇者は魔王と出会つた頃を思い出して「ふつ」と口元に軽く笑みを浮かべた。

終わつた書類を整理しようと机に視線を戻そうとすると、窓の外の城の入口あたりで何者かと門番が揉めているのが目に入った。

（また城に誰か駆け込んできたのか……？）

戦争後、殆どの人間と魔族は友好的な関係を築いているが、未だに互いの種族についてよく思わないものも少数おり、何か問題が起きるたびに助けを求めて民衆が城に駆け込んでくることも少なくなかつた。

「……あれは、魔王……？　あんなところで何してんだ？」

何かあつたのかと見つめると、そこにいるのは恋人である魔王のようであつた。最近はこの城での生活にもすっかり慣れて、城内で侍女たちと楽しそうに話してゐる姿などをよく見かけていたが、誰かともめているのを見かけるのは初めてだつた。

「……今日あいつは自室でゆつくりしているはずじやなかつたか？」

窓の外の状況に驚きつつ、目を凝らして門の様子を見てみるとここからでは何を話しているかいまいちよくわからない。

「たくつ……」

様々な疑問が頭に浮かぶが、考えるよりも早く身體が勝手に動いた勇者は急いでその場所に向かうのであつた。

◇ ◇ ◇ ◇

体がバレてしまつた場合面倒なことが起きないと
は言い切れない。

「全く……困ります、魔王様……！　勝手に一人で
お出かけなど、せめて従者を一人連れて行つてくだ
さい！」

駆けつけると門番の困惑した叫びが聞こえてき
た。

「……おいお前達……何してるんだ？」

勇者が声をかけると二人が驚きながら振り返り、

従者が泣きつくように駆け寄ってきた。その従者が

いうはどうやら魔王が一人で街に出るといつて

聞かないらしい。

先程言つたとおり、人間の中には未だに魔族を

よく思つていなものもいるため、街中で魔王の正

ながら続けた。

勇者が魔王のほうへ近づくと彼女は一步後ずさ

つた。

「お前が揉めているなんてめずらしいな。一人で出

かけたいなんてどうしたんだ？」

そう問い合わせると魔王は小さな声で呟いた。

「侍女たちが外の市場に他国の珍しい果物が入つ

たと言つていたのを聞いたんだ……」

「果物？」

他国の珍しい果物、確かに十分興味をそそられる

ものだがまだ話が見えず、勇者が不思議な顔をして

いると、それに気づいたのか、魔王は少し赤くなり

ながら続けた。

「その果物には疲れを取る効果があるようで、勇者が、最近疲れているようだつたから……」

「オレのため……？」

勇者がゆっくりと呟くと、魔王は大きく頷いた。

そして、勇者のためのものだったので自分で見て直接買いに行きたかった、また恥ずかしくて侍女などには頼めなかつたと話した。

魔王の優しさに勇者はおもわず抱きしめそうになるのをなんとか我慢し、門番へこう伝えた。

「まあこんなかわいい理由なんだが、オレがついていけば何も問題はないよな？」

後ろで魔王が小さく「えつ」と声を上げる。

「ええ、ですが、お一人で行かれるとなると……街のものが気づいたら……」

勇者の提案に門番はオロオロと二人を交互に見つめる。

「大丈夫だつて、オレのマントを被つていけば角だつて見えないし、バレるわけねえよ」

そう言いながら、さつとマントを脱ぐと、魔王の頭からすっぽりと被せる。

「ほら、これなら大丈夫だろ？」

勇者が満足気な顔をすると、門番は呆れ気味にため息をつく。

「おい、ついてくるなんて……！」

「オレが勝手に心配してるだけだから気にすんな。

ほら一緒に行くぞ」

そう告げるとまだ何かぶつぶつ呟いている魔王の手を強引に引っ張り、抱きかかえると近くの馬に

飛び乗る。

「落ちたくなければちゃんと掴まつておけよ、魔王」

手綱を勢いよく握り、
「一人つきりなんだしこっちこいよ」「

「勇者様お待ち下さい！」

慌てる門番の声の静止を振り切って馬を走らせ

た。

る。

後ろを振り返って手を差し出しながら声をかけ

る。

「なあ手出せよ、ふつ……何気にしてんだ。息抜き

も大事つて言うだろ？　一日中部屋にいるのは退

屈だしな」



魔王は自分のワガママで勇者を連れ出してしま

つたのだと気にしているようであつた。

二人で馬に乗り、駆けること十分あまり、人々
のざわめきが段々と強くなつてきた。

「まあ今日は仕事も終わつたし、こうやつてお前と
一緒に出かけたかったからいいんだよ」

「え……終わったつて……」「

近くの木に馬を結びつけて、すっかり黙っている

魔王監禁～オレ様勇者に捕らえられた女勇者～
ショートストーリー

魔王に問いかけると小さく頷き、後ろをついてくる。

「……つたく、それじゃ手繫げないだろ？　せつか

く一人つきりなんだしこっちこいよ」「

から、ああ……そうだ、なあ、ご褒美よこせよ」

出した。

驚いた顔で見つめてくる魔王の手をそつと引いて、吐息混じりに耳元で囁く。そのまま強く抱きしめると、魔王は恥ずかしそうに頬を赤らめた。



「可愛い……ここが外じゃなきや我慢できなかつたかも、すげえたまんねえ」

ゆっくりとそう告げながら、顔を近づけ頬にチュ

ツと軽くキスをする。

「なつ、外でそういうことは……」

二人がそのまま歩き続いていると段々とあたりに家や店が増えてきて活気の良い声が聞こえてきた。

「いらっしゃいませ！」

店の掛け声に導かれるまま市場に足を踏み入れる。

満足げに笑う勇者とは対照的に魔王は恥ずかし

そうに頬をおさえている。

(たく……その反応が余計に煽るんだよ)

照れくささをこまかすように軽く咳払いをする

と、まだ頬をおさえている魔王の手を引いて歩き

「おい、迷子になるといけないから手離すなよ」

顔を近づけ、勇者がそう言うと魔王は頷きながら

ぎゅっと強く握る。魔王は市場というところが珍しいのか、ここに来てからずっとキヨロキヨロとあた

りを見渡している。

「魔族にもこういうところあるのか？」

「あるはあるが……こんなに活気はないな……」

そのままお互いの市場事情について話しながら

往来の激しい道を進んでいると、

「外国の珍しい果物が入荷したよ！」

と八百屋の活気のいい声が聞こえてきた。

声のする方へ近づいてみると、そこにはつやつ

やと輝く果実がカゴいっぱいに並べられていた。

「お前が買いたかったのってこれか？」

勇者が指を指して魔王に問いかける。すると、店

主が自慢げに一つを、側にあつたナイフで皮を剥いて差し出してきた。

「これは珍しいものでなかなか手に入らないんだ

よ。一口どうぞ」

二人は恐る恐る一粒ずつ手に取り、一気に口に入

れるとみずみずしい果汁が口いっぱいに広がった。

「うまいな」

勇者がそう言おうとするよりも先に、隣にいた魔王が呟いた。

「そうだろーー？ そのまま食べてもよし、ジャム

にしてもよし、なんでも美味しい魔法の果実だよ」

うまいと言われ、店主は満足そうな顔で頷いた。

(たしかにうまいし、いくつか買っていくか)

勇者が懐から金貨を取り出し、店主に話しかけようとするが横にいた魔王が身を乗り出し店主に声をかけた。

「なるほどジャムか……！ たしかに美味しそう

だ。よかつたら作り方を教えて欲しいんだが……」

「ああ、もちろん。ええと……ジヤムの作り方は……

•

話しかけるやいなや店主とすつかり意気投合し、

パイやケーキなど他のお菓子についても楽しそうにスイーツ談義に花を咲かせている。

(魔王が楽しそうでよかつた)

はじめのうちは一生懸命話している姿を微笑ま

しく見つめていたが、時間が経つにつれ段々と自分が他の男と魔王が楽しそうに話しているのが気にならなくなってきた。

（……たく、あいつ楽しそうにしすぎだろ、オレと

いんのに……)

そんなこと考えてはいけないと思い、すぐ頭を振

(ここにいたら魔王の邪魔しちまうし……仕方ねえ)

いよいよしびれを切らした勇者は、果実の入つて
いるカゴを手に持つと、金貨の入つた袋をその場所
に置きそのまま歩き出した。

「え、お客様！　こんなにもらえないよっ！」

店主は慌てて声をかけるが勇者は立ち止まる気
配はない。少しの間固まつて勇者の歩いていった方
向を眺めていた一人だったが、店主が我に返りに声
かけた。

「ええと……私はいいから追いかけたほうがいい
んじやないかな……？」

(え) にいたら魔王の邪魔しちまうし……仕方ね

三

いよいよしびれを切らした勇者は、果実の入つて
いるカゴを手に持つと、金貨の入つた袋をその場所
に置きそのまま歩き出した。

「え、お客さん！ こんなにもらえないよつ！」

店主は慌てて声をかけるが勇者は立ち止まる気配はない。少しの間固まつて勇者の歩いていった方向を眺めていた二人だったが、店主が我に返りに声

かけた。

「ええと……私はいいから追いかけたほうがいい

んじやないかな……？」

店主の言葉を聞いて魔王は店主に一礼し、急いで

わなかつたのだ。

追いかけると勇者は少し不機嫌そうに果実の入った袋を馬の背中に積んでいた。

「ふふふ……それって嫉妬したってことか……？」

やつと追いついた魔王ははあはあと息を切らし

少し笑いながら追いかけると勇者は恥ずかしそうにうつむいた。

ながら、勇者の行動の意味がわからず問い合わせた。

「なつ……なに笑ってんだよ。子供っぽくて悪か

「なんで急に帰ってしまうんだ。まだ話していたところだつたのに……」

「なつ……なに笑ってんだよ。子供っぽくて悪か

「ころだつたのに……」

「いや……そうじやなくて、すこし前なら私も一緒

「……わかつてんだよ。そんなこと……でもお前がオレ以外のやつと楽しそうに話してるのが気に食わなかつたんだよ。仕方ないだろ……」

「あたりまえだろ、樂しそうに話しているのに邪魔はしたくなかったんだよ」

勇者自身、嫉妬なんて自分でも子供っぽいことをしているという自覚はあつた。

「あたりまえだろ、樂しそうに話しているのに邪魔はしたくなかったんだよ」

だがそれでも、せつかくの一人での外出なのに、

そんな勇者の姿があまりに可愛く、魔王は近くに

魔王が自分以外の男と話しているのが少し気に食

駆け寄るとそつと後ろから抱きしめた。

「お前が、私のスコーンを美味しいといつてくれた

優しく抱きかかえ馬に乗せた。

から、ジャムにしたら合うかなと思つて話を聞いた
だけで……別に楽しそうに話をしていたわけでは

る、ただし勇者には味見係をやつてもらうぞ」

……

ぎゅっと勇者の背中に顔を押し付けながらそう

戻した魔王が微笑んだ。

告げる。部屋などで一人のとき以外は恥ずかしがり、

「なんだ、すっかりいつもの魔王に元通りだな。た

あまり抱きついたりしない魔王の驚きの行動に一

瞬かたまりかけるものの、すぐに身体の向きを変え

まには外でも素直にしてみると嬉しいけど

勇者も抱きしめ返す。

後ろから魔王を抱きしめるような体勢で馬を走ら

せる。

「だからわかつてるつて、オレが勝手に嫉妬しただ

けつつか……。なあ早く帰ろうぜ。お前のスコーン食べたいんだよ」

そういう途端に勇者の腹が小さく鳴った。二人

な？ チュツ」

そのまま顔を見合させて笑いあつたあと、魔王を

風でなびいたマントのフードの隙間から見える

魔王の白い首筋にキスをすると一瞬でそこが真っ赤に染まる。

「……な、これだから勇者は……！」

魔王は恥ずかしそうにうつむく。そんな愛らしい恋人の姿を後ろから見つめながら城への帰路を急ぐため、勇者は馬の手綱を強く握るのであつた。



一方その頃、木の陰から二人の姿を見つめるものがいた。

「あれはやつぱり勇者様と魔王様だったのか……」

それは金貨の袋を持つて追いかけてきた果物屋の店主であつた。

渡そうとしたものの、二人の雰囲気で出ていくに

行けず、影から見る格好になってしまったのだ。

「肖像画で見た姿と似ていたからもしやと思った

が、本当に仲がよろしいんだな……」

そう呟いた店主が市場に帰り、みなにこの話を伝え、勇者と魔王のラブランプつぶりを知るのはまだ少し先のことである。

終わり